

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会

〒753 山口市大手町2-18

山口県教育会館内 TEL 0839 221218



創刊のことば

松風会理事長 松永祥甫

この会報「松門」は予てより検討を重ねていた松風会の事業の一つで、漸く初刊の運びになりました。

松風会は吉田松陰先生殉難百年を記念して昭和三十四年に発意し、昭和三十六年に完成を見た松風寮の事業経営に端を発し

て、昭和四十九年に財団法人として山口県教育会から独立した事業体であります。昭和五十七年三月にその土地が市道建設に充てられたため、二十一年間に亘って経営された山口大学学生用の松風寮は廃止となり、替って新たに山口県教育会館内に一室を得て松陰先生

の資料展示、先生の研究研修及び顕彰事業を行って今日に至っております。

さて、松陰先生については、余りにも先生が不世出の偉大な人物であるだけに、先生を扱った刊行物は二百種に垂んとしている云われております。何れにしても先生を

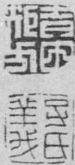
短絡的に兵学者・志士・思想家・教育者というようなことでは、先生を正しく理解し、認識することにはなりません。

時代は外圧を受けて封建国家は危機存亡の秋であり、当時最も豊富な知識と先見性を有された先生は世界の状況を直接自分の眼で視るため国禁を侵して海外渡航を企てて失敗し、幽囚の身となり、そこに松下村塾の教育を通じて幕藩体制に取組む有為な人材の育成の機が到来致しました。二年の短期間でありましたが、身命を賭しての師弟俱学の教育であり、しかも三十歳にして遂に刑場の露と消えられました。

至誠而不動者
未之有也

吾學問廿年終亦而立然未敢辭第一語
今茲開左之行願以身驗之若乃死生大事始置焉已未五月

二十一回猛士



「身はたとひ武蔵の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」の歌が代表するように留魂空しからずと申しましようか、その子弟から明治維新を導いた中心的人物が数多く出ております。松陰先生が東西に比類無き教育者

と称せられる所以でありましよう。又「世に身生きて心死する者あり、身亡びて魂存する者あり」の説を引用して所見を述べておられますが、先生の信念や言行は今に生き続けているものと申し得ましよう。

翻って今日、日本の現況は奇蹟的とまで云われる世界最優位の経済的国力の伸張を遂げておりまして、国内的には平和で豊かな国民の生活が営まれておりますが、一面国際的には強力な圧力を受けて非常な危機感に襲われております。

このような観点に立つとき、今こそ一身を国のために捧げられた松陰先生に学び、松陰精神の体得に力めることは喫緊の要務と考えられます。この会報はそうした要請に応え、併せて松風会の活動を広く紹介しその普及発展に資せんことを期する次第であります。因みに松門は松陰門下生の略で、その題字は本会と縁の深い岸信介先生の御筆蹟であります。謹しんでお礼を述べます。この発刊を機として一層この研究が輪を拡げること

創刊を祝して



山口県知事
平井 龍

郷土が生んだ維新黎明の先覚者吉田松陰先生の遺徳とその精神の普及振興を図っておられる松風会が、このたび待望の会報「松門」を創刊されるにあたり一言お祝いを申し上げます。

近年、教育のあり方が国民的課題として論議され、なかでも青少年を取り巻く諸問題が憂慮されているところではありますが、21世紀を指呼の間に望む今日、教育の成否こそ国の盛衰を分ける「百年の大計」といっても過言ではありません。

このような時期に、県民の誇りとする偉大な教育者吉田松陰先生の思想を伝承せんがため、本会報を発刊されますことは、誠に時宜を得たものと考え次第であります。

私も、教育文化の振興を県政の目標の重要な柱とし、学校教育の振興を始め県民の生涯教育の啓発普及など「心ゆたかな人づくり」を目ざした諸施策を積極的に推進し、「活力とうるおいに満ちた山口」を創造してまいりたいと考えております。

会報創刊の記念すべきときにあたり、今後とも松風会の一層の御発展と皆様の御健勝を祈念いたしまして御挨拶いたします。

「吉田松陰全集」が完結の声に沸いたのは、昭和十一年暮のことである。山口県教育会はその翌年の春、椿東小学校の講堂で、世紀の大作と仰ぐ全集の刊行記念大講演会を開催した。松陰の英魂蘇るという喜びに松門の同志に憧れるものたちが期せずして惹き集ってきた。

当日の講師は編集に心魂を傾けられた玖村敏雄先生である。あの日の松陰論に打ち込まれた先生の熱っぽい論調に、大衆は涙ぐんで聴き入った思い出がある。その日の論旨は五十年の昔に置き忘れたが、感銘の薄あかりだけははっきり残っている。



親思うこころにまさる 親ごころ

浅原 美橘

記念講演薄あかり

忘れかねているそのお話というのは、松陰が安政の大獄にかかわって、野山獄から江戸に引きさられて行く松陰出発の前夜物語りである。あしたの安政六年五月二十五日の松陰護送の責任者は司獄の福川犀之助である。予てから松陰を私淑して己まなかつた福川は、二十四日の深夜ひそかに松陰を杉家に連れ、父母たちに心残りなく訣別させた。まさに果斷の好男子というべきか！

思いがけぬ計らいに杉家一族も門人たちも、深い感激を覚えた。滝さんはすぐに風呂をたい。温かい湯を使う疲れたわが子の姿を見まも

ふるさと路の思い出を顧みた。七月始め松陰は江戸竜の口の評定所で尋問をうけ、国事犯の容疑で伝馬町の獄屋に監禁された。十月になって勤王志士の処断が殊の外きびしくなった。

死罪は免れぬと知った松陰は十月二十日父・母・叔父・兄に「永訣の書」を書き送った。

『平生の学問浅薄にして至誠天地を感格すること出来申さず 非常の変に立到り申し候 嘸々御愁傷も遊ばさるべく拝察仕り候

親思ふこころにまさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん」杉家一統にささげた松陰のこの涙は、孝行の極致をさぐりあぐねるものの絶叫である。

松陰にしてはじめて言い得るこの悠大な自負と卒直な自省の交錯するところに親への切ないお詫びがにじみこんでいる。

親孝行とは、この中に流れる遠い人の世の倫理と情愛がむすびついて「語り部」として語りつがれている不易の道である。

最近、家族縁に恵まれたさる刀目の葬礼に列した。大学生の孫娘によって慎まじやかな弔辞が捧げられた。その「おばあちゃん孝行」という呼びかけが人

永訣のおわび

松陰は毛利藩府の命によって萩を出発した。帰らじと思ひ定めし旅への感傷を涙松によせて

心から心への偉大な教育

三輪 稔 夫

安政三年五月二十六日夜、松陰は杉家の幽室において親族の子弟たちを前に、『孟子・盡心上・第三十六章』の「居は氣を移し、養は體を移す」を取り上げ、いきなり次のように話し出した。「余一間の室に幽閉し、日夜五大洲を并吞せんことを謀る」と。

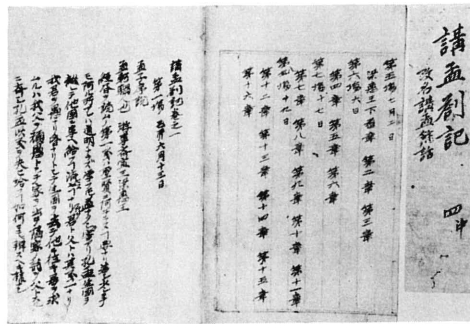
この居は、松陰の「一間の室に幽閉し」ている現前の居である。『孟子』の本章に述べる居は、どうも境遇や環境を意味しており、人の心は王子様のような境遇に居れば自然と気高く上品に見え、また栄養が体をりっぱに変えるといった居と養に当る。さらに『孟子・滕文公下・第二章』にある「天下の廣居」、すなわち万人に恥じない正々堂々たる境涯といった仁の道を指す居があったことを思い出さなければならぬ。

聴講していた子弟たちは驚いたにちがいない。併吞を謀るといえば、普通、武力をもって全世界を征服することだが、松陰は手足をもがれた幽囚の身である。松陰の話には、単なる空想や嘘はないはずだが、こんなでつかいことをよくもよくも考えられることだ。それにしても、胸のふくらむ思いのため、あたりは一瞬間唾を呑んだ静けさが漂った。

だんだんと話が進むにつれて、居にもいろいろと含蓄や意味のあることが先人によって示されているなど、かすかに感付けないこともない。雨露をしのぐ住

これが「居は氣を移す」ということである。常人であれば、普通の人間であれば誰でもできないことはない当り前の行程である。

鎖国の上、大艦巨舶もない日本として、「居は氣を移す」とことさえ考え及ばない自分たちである。一体松陰はどこまで心の



些を築こうとしているのである。松陰ともあろう人が、世界の征服など考えるはずがない。攘夷という防衛的な語でさえ、松陰は最初駭愕と呼んだ。嘉永六年十一月二十六日、肥後藩士横井小楠に与えた手紙の中でこれを使っている。駭とは馬を手綱で御することであり、道を弁えない戎を和らげて、決して他を侵さないように取り計らうことである。

偉大な教育者とは、自らの学問を感動とともに巨視的に高め、相手の心に憤排をうながすことでなければならぬ。この点「請孟創記・盡心上・第三十七章」において、憤排こそ実心実事であることを説く松陰の意図を感じる。さらに『同・第三十八章』では一転して、相手の心信じ、「萬物我に備はる」、「良知良能」、「性善」を「造

の心をつた。忘れてはならない子どもの言葉である。

こうして見るとき、松陰の親孝行という律儀も、女子学生のおばあちゃん孝行という愛惜もすべて日本の家に根づいている人間関係の原型である。そこに素朴な教育の原点が芽生えてくる。世上に「いじめ」などという問題の提起が情けない。松陰に学びたいのは教育の原型としての心やさしい親孝行である。

二十七日断罪。辞世の一端に「死して君親にそむかず」と！松陰の孝心、正に至れるものか。

化の妙」として、心の深奥、極微の世界からの照応を忘れない松陰の魂が輝いているように思われる。

松風会 役職員名簿

理事長 松永 祥甫

理事 二木 秀夫 山本 重治

浅原 美橘 三輪 稔夫

大田 恭次 山本 博一

石川 稔 谷口不二彦

監事 岩本 肇 陶山 長

事務局長 谷口不二彦

松陰の足跡をたずねて ①

下 田

麦川小学校長 岩野和夫

(一)

九月二十七日夕、雨に煙る下田に降り直ちに本日の宿舎清流荘に落着く。

宿では、下田市教育長、土屋氏より松陰史跡の保存、松陰像の建設に努力された賀茂郡教育会の活動、下田市民が松陰に寄せる気持ち等を伺い得たことは、明日から史跡探訪をする私たちの心を一層奮い立たせた。

賀茂郡教育会は、昭和十四年度当初、至誠憂国の士であり、教育者の権化と敬仰する吉田松陰の像を、由緒深い柿崎海岸に建立することを決議し、十七年十月に完成した。松陰の心が時代と処を問わずどこでも、いつの時代にも多くの人々の心を打ち続けていることを肌で知り得て感動した。

学問を修め、諸国を遊学し、至る所で文武知名の士を訪ね、同志と共に時事を討究することを重ねた松陰は、海外事情を知ることの重要さをさとり決意し

て下田の土を踏んだのが嘉永七年三月十八日のことであった。

(二)

私たちは翌日、回顧録を片手に、先ず蓮台寺にある「吉田松陰寄寓の跡」村山邸を訪ねた。下田から一里はなれた蓮台寺



(吉田松陰寄寓の跡)

温泉に松陰が足をふみ入れたのは踏海の企てから身をかくすことと、疥癬治療の目的からであり上の湯に入湯中、村医者村山行馬郎と知り合った。

二人の間でどのような会話が交され、何が機縁となったのか

松陰は村山邸に寄寓することになった。回顧録三月二十日の文にはじめて「是の夜浪生は下田に帰る。余は村に宿す。」とある。松陰は遊歴の際処々方々で師と仰ぎ、友として志を語り合う人を求めているが、村山行馬郎との出会いは全く偶然の機縁ではあるまいか。松陰の人間的魅力が村山を引きつけたのか。

村山邸は、今も当時の面影を偲ばせるそのままの形状で保存されており特に松陰が寝起きした天井裏の二階八畳の間や浴槽が掘り下げられている低い内湯も二〇年前、そのままで、松陰の息遣いや体臭が漂っている感じさえした。下田踏海という大事を前に、暖かい安らぎを得た村山邸であったことが察せられる。

現在では当主夫人が寄寓跡の保存管理と案内説明役を受け持たれて居り、ひとつひとつの遺品や関係資料、書籍類がよく整理されている。閑静な部屋に端座した時、心の引きしめる感激をおぼえた。

(三)

世の人はよしあしごとくもいはばいへ 賤が誠は神ぞ知るらん
下田獄中で読んだ歌で、回顧



(天井裏の二階)

録三月二十七夜の記に述べられている。その「吉田松陰拘禁の跡」を訪ねた。踏海の壮図空しく破れ去った松陰と金子重輔がいさぎよく自首して拘禁された長命寺跡である。今は下田保健所の敷地であり、その中に御影石の碑が建ててある。松陰はその後、平滑の獄に移され、四月



(吉田松陰拘禁の跡)

十一日江戸送りにされた。前掲の歌をここで読み、一片の私心なく、所信にむけて誠を盡した気持ちだが、今は唯當時を偲ぶべき何物もないまま静かに眼を閉じると、松陰の息吹きがひしひと感じられた。

(四)

この後は日本の歴史の一大転機をもたらした踏海が実行された柿崎にある「松陰踏海の遺跡」を訪う。

三島神社境内に建つ松陰立像は前記したように賀茂郡教育会が中心となって建てたものであり、その眼ははるか東の海を凝視し、今でも踏海の企てをひめる青年松陰の雄姿である。

その台座に
道守る人も時には埋もれども
みちしたえねばあらわれもせ
め 矩方

と刻まれている。
「道を守る人は時には埋もれ忘れられてしまふだろうが、道はたえないから、後世必ずあらわれると自分の考え、自分の行動が必ずや、引き継がれ実現するであろうと信じ」従容として、三十才の命を終えた松陰の信念を感じ涙を禁じ得なかった。

(五)

柿崎弁天島の入口に「金子重輔之碑」と「松陰遺墨七生説」の碑が建っている。

この碑の建立についてのエピソードを聞かされ又感激する。

明治二十七年、下田の医師浅岡杏庵外四名は、松陰の記念碑を建てるべく品川弥二郎子爵に相談したところ、子爵は「松陰先生は御生前に『俺の碑よりも金子重輔の碑を建てたい』という意味の話をされていたので、そうすることが先生の御遺志に添うのだ」と話されたので明治二十八年十二月「金子重輔之碑」が建てられたという。碑文は岩倉嶽で病死した重輔を悼み、松陰が涙をのんで綴った「金子重輔行状記」が漢文で刻まれている。後明治四十一年、松陰没後五十年祭に際し、時の村長、曾我彦右衛門氏等により「松陰遺墨七生説」の碑が建ったということである。

(六)

波静かな下田港を弁天島に立って眺める時、回顧録「三月二十七夜の記」が想い出される。

「…弁天社中に入り安寝す。ハッ時（午前二時）社を出て舟の所に往く……岸を離れること一町許り、ミシシッピー船へ押付く。……又舟に還り力を極めて押行くこと又一町許り」とあるが、一町という距離感と企てが今、実現しそうになった時の気持ちに想いをいたしながら、艦の位置がどの辺であつたらうかと海上を探る。

この地を小舟で漕ぎ出た時、既に松陰の運命が決まった。そして日本の歴史も今までと違った方向に向けて回転し出した一瞬でもあった。その意味では、こここそ維新胎動の地ではなからうか。

想いはいつまでもつきず、去るに忍び難さを感じたがこの地に別れをつげた。

松陰は回顧録、三月二十八日の記の終りに、

「將に以て身を没せんとす。往事を回顧すれば、感極まりて悲生じ、悲極まりて大咲阿々、筆を投じて霹靂の声をなす。」

と記して、その一節を結んでいるのを見て、松陰の憂愁、悲憤が、私の胸に沁みとおる。

松陰の下田に印した足跡は、嘉永七年春の一月の行動であるが、その一つ一つは松陰の手



(弁天島の洞窟)

と足で刻みこんだ下田である。時の流れで、松陰は悲運であったがその後、日本の歴史を大きく変えた。この事に対して今も下田の人々は、松陰を身近に感じ、心の中にいつまでも生き続けさせるために多くの方々が心を砕いておられることを知り、松陰を生んだ山口県人として深い感銘をおぼえた。

(七)

訪ねることは出来なかったが、松陰の踏海の企てが空しく破れ、送り返えされ上陸した所にも碑が建てられていることを聞き及

んだのでそのことについて記しておく。

「三月二十七夜の記」に「上陸せし所は嚴石茂樹の中なり」と記されているように、松陰が米艦から送られ上陸した所は福浦の海岸である。この海岸の一角に記念碑が立っている。

浜崎小学校前から須崎に向って、県道を数十米歩むと、右手に福浦に下る小径がある。

椎・トベラ・椿の低い林を抜けると、僅かな平を持つ小さい浦に出る。前方に湾をへだてて下田の街を望む。ここが福浦であり、



(吉田松陰先生像)

下田に向かい右手の岩石の上に「吉田松陰上陸所 頭山満」と彫られた記念碑が立っている。

「昭和九年十月、須崎少年団」と記されているそう。

碑は石廊崎に真向きで、背後にウバメガシワがはうように茂り、黒松も二三本見えるということである。

(八)

以上のように下田における松陰の足跡を訪ねて感じたことは、賀茂郡教育会を中心として下田の有志によって松陰の下田踏海

の歴史を重視して、日々の教育実践の中に取り入れていること。

松陰先生を敬慕する人々が、数度に亘り先生の遺徳顕彰の事業を計画したことなどである。

明治中期から下田地域民の心底に流れてきた、先生敬慕の止み難い心情が今日の史跡保存に

連なっていると強く考えさせられた。

さらにこれらの史跡の多くが昭和五十六年三月に市に移管されるまで賀茂郡教育会が保存管理の大事業を続けたということである。特に昭和四十九年の伊豆沖地震による松陰像の倒壊に際しては、いち早く復元もされている。このように、地域の校長や教員で構成する教育会が次の世代に松陰の至誠愛国の至情を伝え、松陰精神を継承しようと念願されていることに心をうたれ下田を後にした。

廻浦行(一八四九、嘉永二年)・平戸行(一八五〇、嘉永三年)・東遊(一八五一、嘉永四年)・そして東北行(一八五一、嘉永五年)・と周遊を重ねるに従って、寅次郎はひとまわりもふたまわりも成長していく。

人生観、使命感、行動力等々は、より明確に透徹し、徹底して変貌する。

嘉永三年(一八五〇)の九月、西遊日記の序にいう。

「心はもと活きたり。活きた

「磯原客舎」私解

東北遊日記の一首から

山口市社会教育委員 清木 顕太郎

るものには必ず機あり。機あるものは触に従いて発し、感に遇いて動く。発動の機は周遊の益なり」と。

同じ二十八日の抄から、この例のひとつを読む。

「是の夜、腹痛起り、枕に伏して事を観る。此の快論に至り、忽然として躍り立ち、端座して机により、顔悦び口誦し、手に墨を磨り筆を把り、以て数篇を抄録す。腹痛も亦やむ。」

が、「江戸に噂程の兵学者なし」と歎息し、遂に「江戸の地に師とすべきものなし」と断じ、意を決して「用猛第一回」の壮挙を決定する。

信義と友情、という名分をかがけ、肥後の人、宮部鼎蔵、南部藩の江幡五郎と盟約。

広い立場から日本を眺よう、と亡命、脱藩の「東北行」である。尊攘報国、という純粋な魂の、みしか持たない寅次郎は、決然と「頭を挙げて宇宙を観」なが

巨艦 海を蔽うて 鯨鯨来る
我 吾が軍を掲げ来りてここ
に陣し
鯨鯢 百万 髪上り衝く
夢断え 酒解け 燈亦滅す
涛声 枕を撼して 夜 夢断え

(評釈)

太平洋を眼下に望む海浜の高き楼にのぼり、海原を渡ってくる長風に吹かれて酒を汲んでいると、思わず顔が火照り、耳朶が熱くなり、いつしかうとうと

ら颯颯と雪の東北路を歩む。時に年二十二歳。正に松陰、完成への旅である。

明けてその正月二十二日、磯原(福島県、北茨城)の客舎で深夜、琴瑟と鳴る太平洋の海鳴りを聴いて詠んだ一首がある。

吟嘯しようとする人、必らず躍動を覚える七言の古詩である。

海楼 酒を把って長風に對し
顔紅に耳熱く 醉眠濃かなり
忽ち見る 萬里 雲濤の外

と、
その中に雲と涛が重なって万里の涯から無数の大海亀が、海を蔽うように、外夷の軍艦が続々とおし寄せてくるのが見える。わが国、きつての大軍略家である私は自ら百万の兵を率いてこれを迎撃すべくここに陣を布いた。

軒昂、凄まじい限りである。が、あつという間に、酔が醒めたのか、騒き消すようにこの壮大な夢が消えていった。いや、は、残念なことではある。

夜もすでに四更(午前二時ごろ)を過ぎてしまったのか、煌々と照らしていた燈火も燃えつきて真っ暗。ただ海鳴りが遠吠えのように聞こえるだけであつた。

このような見るべき感慨の詩はますます膨らんで、おおよそ六百首にも及ぶであろう。

分類すれば、学問修養の詩、肉親を思い、朋友を思い、故郷を思う詩・詠史・憂国慨の詩、というようになるであろうか。

生涯、歩みつづけること一万二〇〇〇km、詩文の交換によって志士的連帯と友情の絆を結ぶもの、全国に、藤田東湖、佐久間象山、橋本左内など百を下るまいという。

未忍焚稿にいう

「志を言い、詩に寄せ、箴戒を寓す」は三十年の生涯を詩人志士として面目躍如たらしめたそれである。

(山口市吉敷)

事務局通信

- ・財団法人松風会の寄付行為には、吉田松陰先生を崇敬し、松陰精神の普及振興を図り、併せてこれを現代に生かすことを目的に、次の事業を行うとして、
- 一、深く吉田松陰先生の事蹟及び精神を研究する。
- 二、講演会・講習会・研究会並びにこれに類する諸会を開設する。
- 三、機関紙・リーフレットを刊行する。
- 四、本会と同様の性格をもつ会との連携またはその助成を行う。
- 五、その他目的を達するため適切な事業を行う。
- ・吉田松陰先生資料展示室の開設 昭和五十八年一月より
- ・「吉田松陰先生東送之碑」の建立 旭村夏木原に青少年キャンプ場開設に伴い、県・県教委・旭村・松風会等より、松陰先生詩碑建立の議が起り、本会の趣旨に合致することから直ちに詩碑建立の決議

杉百合之助は松陰の実父である。名は常道字は伯愈、通称を百合之助、恬斎と号した。天保元年（一八三〇）松陰はその次男として生まれた。松陰をめぐる人々の中で松陰の最大の理解者であり、松陰が家大人と呼んで最も敬慕してやまなかった人である。東送に際して詠んだ「平素趨庭違訓誨、斯行独識慰嚴君」の詩文が、その心情を最もよく物語っている。

百合之助は身を持すること極めて峻厳奇癖とまで言われるほどの律義者であった。恭敬素樸寡黙にして勤勉力行の士であった。暇があれば読書に耽けるといふ好学の習性は、父七兵衛の影響であらうか。

杉家は二十六石という微禄の下士で半士半農の貧困な家であった。特に文化十年萩城下に四百余戸を焼失するという大火があり、杉家も類焼の被害をうけた。当時百合之助は僅か十歳であった。家屋家財を失った杉家の人々は、その後松本村で借家を転々とする数年が続いた。

父七兵衛は百合之助が六歳のころから、職務の関係で家をあけ、江戸に在住することが多かった。その間百合之助は父にか

わって母を助け、家事農事をはじめ、姉妹の世話に至るまで細心の気配りをした。

文政七年父七兵衛の死とともに百合之助は家督を継いだ。翌年護国山の南麓団子蔵に家を求めて移り住んだ。周囲に人家もない草葺きの小さな家であった

が、萩の城下を一望のうちにこそある眺望は、けだし絶景であった。

松陰をめぐる人びと (I)

杉 百合之助 — 石川 稔

文政九年、百合之助は藩の重臣毛利志摩の家臣（陪臣）である村田右中の第三女滝と結婚した。百合之助二十三歳、滝は二十歳であった。

（杉滝について

百合之助夫婦は結婚後も母や

弟妹（吉田大助、玉木文之進等）と同居していた。間もなく長男梅太郎、次いで寅次郎（松陰）と次々に七人の子宝に恵まれた

しかし、貧困と大家族の世話に屈することなく、後日、松陰が特筆大書する如く、杉家の伝統

を引きつぎ美しい家風を築きあげた。

「杉の家法（家風）に世の及びがたき美事あり。第一には先祖を尊び給ひ、第二に神明を崇め給ひ、第三に親族を睦じくし給ひ、第四に文学（学問）を好み給ひ、第五に佛法（祈祷・迷信）に惑ひ給わず、第六田畠の事を親らし給うの類なり」（書簡妹千代宛）

松陰等兄弟はこの美しい家風の中で涵育薫陶された。さらに百合之助は幼少の二兄（梅太郎・寅次郎）を率いて炎天下の山に登り草を刈り、霜の朝に薪採りをした。又田畠に誘導し、

四書五経の素読、頼山陽、菅茶山の詩を吟詠させた。文政十年の詔書に関しては王室の式微、武臣の跋扈を嘆き、沐浴衣をあらため、遙かに京都を拝して泣いた。

厳父百合之助の教育は叱咤することではなく、自己の生活を厳しく律する生きざまを通して行い、その信念と感動を体ごとく伝授した。子は父を敬し、父は子を信頼し、終始松陰を見守りながらその呼吸に呼応することく、慰撫と激励を送った。

松陰は十一歳にして藩主に謁

し家学を講じた。多くの人がその出来ばえを賞讃したが、百合之助は少しも喜ぶことなく、「吾が子は兵家の後なり、区々たる講説何ぞ誇るに足らんや」と言って、さりげなく増上を戒めた。

また、嘉永五年、松陰は亡命の罪により土籍世禄を没収された。その時も百合之助は少しも動じることなく、「汝が素志遠大なり、一たび誤るも国に報ゆるは尚ほ時あり、豈に勤めざるべけんや」と松陰を慰撫した。

松陰が下田踏海に失敗し野山獄に在る時も、長男梅太郎を介して講読述作の便を講じ、安政五年松陰再入獄の告別に際しても、病床に枕を抱いて「一時の屈は万世の伸なり、繫獄何ぞ傷まんや」と激励を送った。

安政六年十月二十七日、松陰は江戸において刑場の露と消えた。その訃報を受けた百合之助は、少しも驚くことなく、遺書を読み「嗟呼、兄一死君国に報いたり、真にその平生に負かず」と、自若としてかすかな笑さえて浮べていた。

松陰はすぐれた天分に加えて多くの師友に恵まれた。そして生の指針を父より授り、その貫徹を父によって確認された。

をし、岸信介先生の揮毫による碑の除幕式を四月十五日、二十一世紀の森開所式の後、平井知事その他多数の来賓を迎えて挙行了した。

●碑面色紙等の贈呈 碑面色紙を印刷して参加者に記念品として贈呈するとともに、県下各小・中・高校、県教委・地教委関係者に、色紙に添えて山口県教育会発行の「松陰読本」を贈呈し、松陰精神顕彰教材として利用いただくことにした。

●吉田松陰研究講座の開設 山口県生涯教育センターと共催三輪稔夫先生、石川稔先生を講師として、県下五カ所で開催した。七百名を越す受講者があった。

●松陰先生の足跡をたずねる旅 下田・東京・青森と、下田踏海の跡・松陰神社・東北遊日記の足跡の一部の実地踏査に五名の方にご参加いただく。

●吉田松陰輪船会 教育会と共催で八月四日に実施。

●研究団体への助成 現在四団体に助成。
●関係図書購入
●元松風寮生との懇親会

資料展示室

山口県教育会館の玄関を入るとロビー左側に松風会がある。部屋は吉田松陰先生資料展示室と事務室とに区切られている。

これは、昭和五十七年三月松風寮の廃止に伴い新設されたものである。

展示室の開

設に当っては種々の苦慮があった。それは松陰先生関係の遺品等の本物が何も無いということであった。しかし、ぜひ一



松陰先生銅像

室を設けて松陰精神の普及振興を図ろうということになった。松風寮時代から在ったものといえ、松陰先生誕生地にある銅像のミニチュア、岸先生

数葉の大阪の写真を作っていた。また、東京の松陰神社やお墓、下田の松陰先生像等の写真も用意した。山口県百科事典、吉田松陰遺墨帖、松陰先生

事典や松陰読本の中心にある写真を参考に、松陰遺墨帖の写真撮影を担当された萩の写真家下瀬氏に依頼して萩を中心とした十

の「誓為邦国幹」、松林桂月先生の「松風寮」、二木謙吾先生の「至誠為事」の三つの偏額と金重菱江先生の「夏木原」の絵、それに吉田松陰全集（大衆版）を主とする十数冊の関係図書だけであった。

そこで、可能な限りの資料を集める努力をした。山口県百科事典や松陰読本の中心にある写真を参考に、松陰遺墨帖の写真撮影を担当された萩の写真家下瀬氏に依頼して萩を中心とした十

松陰先生の俳句・至誠の書・絶筆の和歌の三部の色紙、および士規七則複製の扁額や年譜も作り、松陰神社で頒布しておられる複製品も展示した。

松陰先生のご協力により、月性顕彰会、その他計三幅の軸の月性肖像、その他計三幅の軸のご寄贈をうけ、一隅を月性関係の展示に当てている。

松風会のこと、が世に知れるに従っていろいろご協力もいただけるようになった。吉田松陰全集（定本）・同（普及版）・松陰先生肖像軸、その他松陰先生関係の出版物のご寄贈も相当数にのぼり資料展示室もだんだん充実してきた。

吉田松陰先生

東送之碑

縛吾台命致關東

對簿心期質昊穹

夏木原頭天雨黑

滿山杜宇血痕紅

昭和五十八年四月

財団法人松風会建之

岸 信介書

自賛肖像軸等の購入もした。

山口県には十数基の松陰先生に關係のある石碑が各地に存在する。小郡町在住の西村勇先生をわずらわしその拓本をとりパネルを作成した。松陰先生の旅行された足跡が一目でわかるような大きな地図もかいてパネルにした。

山口県教育関係者新年懇話会から松陰先生肖像の油絵・幼き松陰を抱く若き母の絵・松陰誕生地の絵・母堂滝刀自像（木彫）・涙松の和歌の書等を借用展示している。

明治以来松陰先生關係の出版物は単行本として約二百冊、その他研究雜誌等の資料はおびただしい数になる。できる限りの努力をしてその収集に当たっているが絶版等のものも多く極めて困難である。古書店をあさり、全国著名古書店の目録も手に入れた収集に努めた結果、松陰先生關係七十数冊、その周辺関係者その他の書籍百数十冊を購入することができた。次号からは図書目録等も順次紹介して皆様のご利用に供したいと思っている。

展示室はいつも開放しているので教育会館への来訪者にはぜひ参観していただきたいと思う。また、皆様にご吹聴いただくとともに松陰研究の場としてできるだけご活用もいただきたい。

（谷口）



松風会資料展示室の一隅

今日の教育への箴言である。

● 懸案の会報発刊が、やっと軌道に乗った。早期刊行をめざし巧遅よりも拙速についた。子育ての要諦は小さく生んで大きく育てること。発展を期したい。

● 題字に岸信介先生のご揮毫を頂き、平井知事さんのお祝詞を賜ったことは、無上の光栄であり感激事である。

● 浅原先生の「孝心に教育の原型を見よ」。三輪先生の「感激なくして教育なし」。いずれも

● 「松門」を手がかりに一人でも多くの方が、松陰研究に志されることを願ってやまない。

● 松風会にお立寄り下さい。

（石川）